



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

24

谷崎潤一郎に

中央公論社

谷崎潤一郎 (二)

昭和41年2月5日初版発行

昭和48年1月30日15版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
原・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

細雪

注解

解説

E・G・サイデンステッカー

584 571

5

口絵

「細雪」

田村孝之介

挿画

田村孝之介

谷崎潤一郎
(二)

細雪

上卷

一

「こいさん、頼むわ。——」

鏡の中で、廊下からうしろへはいって来た妙子を見る
と、自分で襟を塗りかけていた刷毛を渡して、そちらは
見ずに、眼の前に映っている長襦袢姿の、抜き衣紋の顔
を他人の顔のように見据えながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子はきいた。

「悦ちゃんのピアノ見たげてるらしい」

——なるほど、階下で練習曲の音がしているのは、

雪子が先に身支度をしてしまったところで悦子に頼ま
て、稽古を見てやっているのであらう。悦子は母が外出
する時でも雪子さえ家にいてくれればおとなしく留守番
をする児であるのに、今日は母と雪子と妙子と、三人が
揃って出かけるというので少し機嫌が悪いのであるが、
二時に始まる演奏会が済みさえしたら雪子だけ一と足先
に、夕飯までには帰って来て上げるということでどうや
ら納得はしているのであった。

「なあ、こいさん、雪子ちゃんの話、また一つあるね
ん」

「そう、——」

姉の襟頸から両肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目をつ
けてお白粉を引いていた。決して猫背ではないのである
が、肉づきがよいので堆く盛り上っている幸子の肩か
ら背の、濡れた肌の表面へ秋晴れの明りがさしている色
つやは、三十を過ぎた人のようでもなく張りきって見え
る。

「井谷さんが持って来やはった話やねんけどな、——」

「そう、——」

「サラリーマンやねん、MB化学工業会社の社員やて。」

「なんぼぐらいもろてるのん」

「月給が百七八十圓、ボーナス入れて二百五十圓ぐらいになるねん」

「MB化学工業いうたら、佛蘭西系の会社やねんなあ」

「そうやわ。——よう知ってるなあ、こいさん」

「知ってるわ、そんなこと」

一番年下の妙子は、二人の姉のどちらよりもそういうことには明るかった。そして案外世間を知らない姉たちを、そういう点ではいくらか甘く見てもいて、まるで自分が年嵩のような口のきき方をするのである。

「そんな会社の名、私は聞いたことあれへなんだ。——

——本店は巴里にあって、大資本の会社やねんてなあ」

「日本にかて、神戸の海岸通に大きなビルディングあるやないか」

「そうやて。そこに勤めてはるねんて」

「その人、佛蘭西語できはるのん」

「ふん、大阪外語の佛語科出て、巴里にもちよつとぐらい行てはったことあるねん。会社のほかに夜学校の佛蘭西語の教師してはって、その月給が百圓ぐらいあって、両方で三百五十圓はあるのやて」

「財産は」

「財産いうては別にないねん。田舎に母親が一人あって、その人が住んではる昔の家屋敷と、自分が住んではる六甲の家と土地とがあるだけ。——六甲のんは年賦で買

うた小さな文化住宅やそうな。まあ知れたもんやわ」
「そんでも家賃助かるよつてに、四百圓以上の暮しできるわな」

「どうやろか、雪子ちゃんに。係累はお母さん一人だけ。

それかて田舎に住んではって、神戸へは出て来やはれへんねん。当人は四十一歳で初婚や云やはるし、——」

「何で四十一まで結婚しやはれへなんだやろ」

「器量好みでおくれた、云うてはるねん」

「それ、あやしいなあ、よう調べてみることに」

「先方はえらい乗り気やねん」

「雪あんちゃんの写真、行つてたのん」

幸子の上にもう一人本家の姉の鶴子がいるので、妙子は幼い頃からの癖で、幸子のことを「中姉ちゃん」、雪子のことを「雪姉ちゃん」と呼びならわしたが、その「ゆきあんちゃん」が詰まって「きあんちゃん」と聞えた。

「いつか井谷さんに預けといたのんを、勝手に先方へ持つて行かはってん。何やたいそう気に入ってはるらしいねんで」

「先方の写真ないのんか」

階下のピアノがまだ聞えているけはいなので、雪子が上つて来そうもないと見た幸子は、

「その、一番上の右の小抽だあけてごらん、——」

と、紅棒^{べんぼう}を取って、鏡の中の顔へ接吻しそうなおちよぽ口をした。

「あるやろ、そこに」

「あつた、——これ、雪あんちゃんに見せたのん」

「見せた」

「どない云うた」

「例によつてどないも云わへん、『あゝこの人』云うただけや。こいさんどう思う」

「これやつたらまあ平凡や。——いや、いくらかええ男の方かしらん。——けどどう見てもサラーマンタイプやなあ」

「そうかて、それに違いないねんもん」

「一つ雪あんちゃんにええことがあるで。——佛蘭西語教^がせてもらえるで」

顔があらかた出来上つたところで、幸子は「小槌屋呉服店」と記してある畳紙^{たたし}の紐^{ひも}を解きかけていたが、ふと思いついて、

「そやった、あたし『B足らん』やねん。こいさん下へ行つて、注射器消毒するように云うといてんか」

脚気^{かっけ}は阪神地方の風土病であるともいうから、そんなせいかも知れないけれども、ここの家では主人夫婦を始め、ことし小学校の一年生である悦子までが、毎年夏から秋へかけて脚気に罹^{かか}り罹^{かか}りするので、ビタミンBの

注射をするのが癖になつてしまつて、近頃では医者へ行くまでもなく、強力ベタキシンの注射薬を備えておいて、家族が互いに、何でもないうるなことにすぐ注射し合つた。そして、少し体の調子が悪いと、ビタミンB缺乏のせいにしたが、誰が云い出したのかそのことを『B足らん』と名づけていた。

ピアノの音が止んだと見て、妙子は写真を抽出に戻して、階段の降り口まで出て行つたが、降りずにそこから階下を覗いて、

「ちよつと、誰か」

と、声高^{こゑたか}に呼んだ。

「——御寮^{ごせう}さん注射しやはるで。——注射器消毒しといてや」

二

井谷というのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子たちが行きつけの美容院の女主人なのであるが、縁談の世話をするのが好きと聞いていたので、幸子はおねてから雪子^{ゆきこ}のことを頼み込んで、写真を渡しておいたところ、先日セッットに行つた時に、「ちよつと奥さん、お茶に付き合つて下さいませんか」と手の空いた隙^{すき}に幸子を誘い出して、ホテルのロビーで始めてこの話をしたのである。実はこちらへ御相談をしないで悪かつたけれど

も、ぐずぐずしていい良い縁を逃がしてはと思ったので、お預かりしてあったお嬢様のお写真は何とものつかず先方へ見せたのが、一箇月半ほど前のことになる。それきりしばらく音沙汰がなかったので、自分は忘れかけていたのであったが、先方ではその間にお宅さんのことを調べた模様で、大阪の御本家のこと、御分家のお宅さんのこと、それから御本人のことについては、女学校へも、習字やお茶の先生の所へも、行つて尋ねたらしい。それで御家庭の事情は何もかも知つていて、いつかの新聞の事件なども、あの記事が誤りだということとはわざわざ新聞社まで行つて調べて来ているくらいなので、よく諒解していただけれども、なお自分からも、そんなことがあるようなお嬢様かどうかまあお会いになつてごらんないと云つて、納得が行くように説明はしておいた。先方は謙遜して、蒔岡さんと私とは身分違いでもあり、薄給の身の上で、そういう結構なお嬢様に來ていただけるものとも思えないし、来ていただいても貧乏所帯で苦勞をさせるのがお気の毒のようだけれども、万一縁があつて結婚できるならこんな有難いことはないから、話すだけは話してみてもほしいと云つてゐる。自分の見たところでは、先方も祖父の代までは或る北陸の小藩の家老職をしてゐたとかで、現に家屋敷の一部が郷里に残つてゐるというのであるから、家柄の点ではそう不釣合でもないの

ではあるまいか。お宅さんは舊家でありになるし、大阪で「蒔岡」と云えば一時は聞えていらしつたに違ひないけれども、——こう申しては失礼であるが、いつまでもそういう昔のことを考えておいでになつては、結局お嬢様が縁遠くおなりになるばかりだから、大概なところで御辛抱なすつたらいかであらうか。現在では月給も少いけれども、まだ四十一だから昇給の望みもないこととはないし、それに日本の会社と違つてわりに時間の餘裕があるので、夜学の受持時間の方をもつと殖やして四百圓以上の月収にすることは容易だと云つてゐるから、新婚の所帯を持つて女中を置いて暮して行くにはまず差支えあるまい。人物については、自分の二番目の弟が中学時代の同窓で、若い時からよく知つてゐるので、太鼓判を捺すと云つてゐる。そう云つてもお宅さんの手で一往お調べになるに越したことはないけれども、結婚がोकくれた原因は全く器量好みのためではかに理由はないというのが、やはりほんとうらしく思える。それは巴里にも行つてゐたのだし、四十を越してもゐることだから、まるきり女を知らないはずはないだらうけれども、自分がこの間會つてみた感じでは、それこそ生真面目なサラリーマンで、遊びの味などを知つてゐるような様子は微塵もなかった。器量好みなどということは、得てそういう堅人によくあるものだが、その人も巴里を見て來た反動

でか、奥さんは純日本式の美人に限る、洋服なんか似合
わなくてもよい、しとやかで、おとなしくて、姿がよく
て、和服の着こなしが上手で、顔立ちももちろんだけ
ども、第一に手足のきれいな人がほしいという注文なの
で、お宅のお嬢様なら打ってつけだと思ふのであるが、

—— というような話なのであった。

長らく中風症で臥たきりの夫を扶養しつつ美容院を経
営して、かたわら一人の弟を医学博士にまでさせ、今年
の春には娘を目白に入学させたというだけあって、井谷
は普通の婦人よりは何層倍か頭脳の廻転が速く、万事に
要領がよい代りに、商売柄どうかと思われるくらい女ら
しさに缺けていて、言葉を飾るような廻りくどいことを
せず、何でも心にあることを剥き出しに云つてのけるの
であるが、その云い方がアウドクなく、必要に迫られて
真実を語るに過ぎないので、わりに相手に悪感を与える
ことがないのであった。幸子も最初、井谷がいつもの急
き込むような早口でしゃべるのを聞いてみると、随分こ
の人はと思うところもあったけれども、だんだん聞いて
行くうちに、男勝りの親分肌な気象から好意で云って
くれていることがよく分るし、それに何よりも、理路整然
と、打ち込む隙もなく話しかけて来られるので、ぐっと
俯伏せに取って抑えられてしまった感じがした。そして、
では早速本家の方とも相談をし、またこちらでもその人

の身元を調べるだけは調べさせていただいてと、その時
はそう云って別れたのであった。

幸子のすぐ下の妹の雪子が、いつの間にか婚期を逸し
てもう三十歳にもなっていることについては、深いわけ
がありそうに疑う人もあるのだけれども、実際はこれと
いうほどの理由はない。ただ一番大きな原因を云えば、
本家の姉の鶴子にしても、幸子にしても、また本人の雪
子にしても、晩年の父の豪奢な生活、蒔岡という舊い家
名、—— 要するに御大家であった昔の格式に囚われて
いて、その家名にふさわしい婚家先を望む結果、初めの
うちは降るほどであった縁談を、どれも物足りないような
気がして断り断りしたものだから、次第に世間が愛憎を
つかして話を持って行く者もなくなり、その間に家運が
一層衰えて行くという状態になった。だから「昔のこと
を考えるな」という井谷の言葉は、ほんとうに為めを思
った親切な忠告なので、蒔岡の家が全盛であったのはせ
いぜい大正の末期までのことで、今ではその頃のことを
知っている一部の大阪人の記憶に残っているに過ぎない。
いや、もっと正直のことを云えば、全盛と見えた大正の
末頃には、生活の上にも営業の上にも放縦であった父の
遣り方がようやく祟って来て、すでに破綻が続出しかけ
ていたのであった。それから間もなく父が死に、営業の
整理縮小が行われ、次いで舊幕時代からの由緒を誇る船

場の店舗が他人の手に渡るようになったが、幸子や雪子はその後も長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大体昔の俵をとどめていた土蔵造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懐しげに覗いてみたりしたものであった。

女の子ばかりで男の子を持たなかった父は、晩年に隠居して家督を養子辰雄に譲り、次女幸子にも婿を迎えて分家させたが、三女雪子の不仕合せは、もうその時分そろそろ結婚期になりかけていたのに、とうとう父の手で良縁を捜して貰えなかったこと、義兄辰雄との間に感情の行き違いが生じたこと、などにもあった。いったい辰雄は銀行家の忤で、自分も養子に来るまでは大阪の或る銀行に勤めていたのであり、養父の家業を受け継いでからも実際の仕事は養父や番頭がしていたようなものであった。そして養父の死後、義妹たちや親戚などの反対を押し切つて、まだ何とか蹈ん張れば維持できたかも知れなかった店の暖簾を、蒔岡家からは家来筋に当る同業の男に譲り、自分はまたもとの銀行員になった。それというのは、派手好きな養父と違い、堅実一方で臆病でさえある自分の性質が、経営難と闘いつつ不馴れな家業を再興するのに不向きなことを考え、より安全な道を選んだ結果で、当人にすれば養子たる身の責任を重んじたからこそその処置なのであるが、雪子は昔を恋うるあまり、

そういう義兄の行動を心の中で物足りなく思い、亡くなった父もきつと自分と同様に感じて、草葉の蔭から義兄を批難しているであらうと思つていた。と、ちょうどその時分、——父が死んで間もない頃、義兄がたいそう熱心に彼女に結婚をすすめた口があった。それは豊橋市の素封家の嗣子で、その地方の銀行の重役をしている男で、義兄の勤める銀行がその銀行の親銀行になっている関係から、義兄はその男の人物や資産状態などをよく知つていふというわけであつた。そして豊橋の三枝家ならば格式から云つても申し分はないし、現在の蒔岡家に取つては分に過ぎた相手であるし、本人もいたつて好人物であるからと、見合いをするまでに話を進行させたのであつたが、雪子はその人に会つてみて、どうにも行く気になれなかつたのであつた。というのは、別に男ぶりがどうこうというのではないが、いかにも田舎紳士という感じで、なるほど好人物らしくはあるけれども、知的なところが全くない顔つきをしていた。聞けば中学を出た時に病氣をしたとかで上の学校へはいらなかつたというのであるが、恐らく学問の方の頭は良くないのであらうと思うと、女学校から英文専修科までを優秀な成績で卒業した雪子としては、さきざきその人を尊敬することができそうもない懸念があつた。それに、いくら資産家の跡取りで生活の保証はあるにしても、豊橋というよう

な地方の小都會で暮すことは淋しさに堪えられない氣がしたが、それには誰よりも幸子が同情して、そんな可哀そうなことがさせられるものと云ったりした。義兄にしてみれば、義妹は學問はよくできたかも知れないけれども、少し因循過ぐるくらい引つ込み思案の、日本趣味の勝った女であるから、刺戟の少い田舎の町で安穩に暮して行くのには適しているし、定めし本人にも異存はあるまいときめてかかったのが、案に相違したのであったが、内氣で、はにかみやで、人前では満足に口が利けない雪子にも、見かけによらない所があつて、必ずしも忍従一方の婦人ではないことを、義兄が知つたのはその時が最初であつた。

が、雪子にしても、お腹の中ではつきり「否」にきまつていることなら、早くそう云えばよいものを、どうとも取れるような生返事ばかりしていて、いよいよとなつてから、それも義兄や上の姉には云わないで、幸子に打ち明けたのは、一つにはあまりにも熱心な義兄の手前、云い出しにくかつたせいもあるが、そういう風に言葉数の足りないのが、彼女の悪い癖なのであつた。そのために義兄は内心否でないものと感違ひをし、先方も見合ひをしてからは、急に乗り氣になつてぜひにと懇望して来るといふわけで、話は退き引きならない所まで進んだのであつたが、いったん「否」の意志表示をしてからの

雪子は、そうなると義兄や上の姉が代る代る口を酸くして頼むようにして勸めても、最後まで「うん」ということを云わないでしまつた。今度は泉下の養父にも喜んで貰えると思つてかかつた縁談であるだけに、義兄の失望は大きかつたが、それより困つたのは、先方に対し、仲に立つて斡旋してくれた銀行の上役の人に対し、いまだに挨拶のしようがなくて冷汗の出る思いをしたこと、——それも、もつとも聞える理由があるならばだけれども、顔が知的でないなどと下らぬ難癖をつけて、こんな、二度とありそうにもないもつたない縁を嫌うというのは、ただ雪子のわがままで、邪推をすれば、故意に兄を苦しい立ち場に陥れてやろうという底意があるのではないかとさえ、取れないでもなかつた。

それからこつち、義兄は雪子の縁談には懲り懲りした形で、他人が持つて来てくれる話には喜んで耳を傾けるけれども、自分が積極的に取り持つことや、先に立つて良い悪いの意見を述べることは、できれば避けたいという風に見えた。

三

雪子を縁遠くしたもう一つの原因に、井谷の話の中に出了た「新聞の事件」というものがあつた。

それは今から五六年前、当時二十歳であつた末の妹の

妙子が、同じ船場の舊家である貴金屬商の奥畑家の倅と恋に落ちて、家出をした事件があった。雪子をさしおいて妙子が先に結婚することは、尋常の方法ではむずかしいと見て、若い二人がしめし合わして非常手段に出たもので、動機は真面目であるらしかったが、どちらの家でもそんなことは許すべくもなかったので、じきに見つけ出して双方に連れ戻して、そのことはたわいもなく解消したかのごとくであつたが、運悪くそれが大阪の或る小新聞に出てしまった。しかも妙子を間違えて、雪子と出、年齢も雪子の年になつていた。当時蔣岡家では、雪子のために取消しを申し込んだものか、ただしそうすれば半面において妙子がしたことを裏書きするのと同じ結果を招く恐れがあり、それも知慧のない話であるからいっそ黙殺してしまつたものと、当主辰雄がさんざん考えたのであつたが、過ちを犯した者はどうあらうとも、罪のない者にとばかりを受けさせておくわけには行かぬと思つたので、取消しを申し込んだところ、新聞に載つたのはその取消しではなく、正誤の記事で、豫想した通り改めて妙子の名が出た。辰雄はその前に雪子の意見も聞いてみるべきであるとは心付いていただけでも、聞いたところ取り分け自分に対して口の重い雪子が、どうせ明瞭な答をしてくれそうもないことは分つていたし、義妹たちに相談すれば利害の相反する雪子と妙子との間

が紛糾することもあるうしと考え、妻の鶴子に話しただけで、自分一人の責任でそういう手段に出たのであつたが、正直のところを云えば、妙子を犠牲にしても雪子の冤を雪ぐことによつて雪子によく思われたいという底意が、いくらか働いていたかも知れない。それというのが、養子の辰雄には、おとなしいようでその実いつまでも打ち解けてくれない雪子というものが一番氣心の分らない扱いにくい小姑なので、こんな機会に彼女の機嫌を取りたかつたこともあるう。しかしその時も当てが外れて、雪子も妙子も彼に悪い感じを持つた。雪子に云わせれば、新聞に間違つた記事が出たのは私の不運としてあきらめるより仕方がない、取消しなどというものはいつも人目に付かない隅の方に小さく載るだけで、何の効果もありはしない、私たちとしては、取消しにせよ何にせよ一回でも多く新聞に出ることが不愉快なのだから、そつと黙殺してしまふのが賢かつたのだ、兄さんが私の名誉回復をしてくれるのは有難いけれども、そうしたらこいさんはどうなるであらう、こいさんのしたことは悪いには違いないが、年齒も行かない同士の無分別から起つたこととすれば、責められてよいのは監督不行届きな両方の家庭で、少くともこいさんについては、兄さんはもちろん私にだつて一部の責任がないとは云えない、そう云つては何だけれども、私は自分の潔白は、知る人は知つてい

てくれると信じているので、あのくらしい記事でそんなにひどく傷つけられる自分であるとは思っていない、それより今度のことが原因で、こいさんが僻み出して不良にでもなったらどうするか、兄さんのすることは万無理窟詰めで、情味がない、第一これほどのことを、最も利害関係の深い私に一言の相談もせずに行うとは専横過ぎる、——というのであったが、妙子は妙子で、兄さんが雪姉ちゃんのために証を立てて上げるのは当り前だけれども、私の名を出さないでも済ませる方法もあつたらうではないか、相手は小新聞なのだから、何とか手を廻せば伏せてしまうことができたろうものを、兄さんはそういう場合にお金を吝しむからいけない、——と、これはその時分から云うことがませていた。

辰雄はこの新聞の事件の時、世間に合はず顔がないと云つて辞職願を出したほどであつた。もつともその方は「それには及ばぬ」ということで無事に済んだが、雪子が受けた災難の方は何としても償いようがなかった。たまたま幾人かの人は、正誤の記事に気が付いて彼女の冤罪を知つたでもあろうが、彼女は潔白であつたにしても、そういう妹娘のある事実が知れ渡つたことは、姉娘を、その自負心にもかかわらず、いよいよ縁遠くする原因になつた。ただ、雪子自身は内心はとにかく、表面は「それくらいなことでは傷つきはしない」という建前であつた。

で、そんな事件のために妙子と感情が齟齬する結果にはならず、かえつて義兄に対して妙子を庇うという風であつた。そして、この二人は、上本町九丁目の本家から、阪急蘆屋川の分家、——幸子の家の方へ、前からも始終、一人が帰れば一人が来るという風にして、代る代る泊りに来ていたのが、この事件をきっかけにしてだんだん頻繁になり、二人が一緒にやつて来て半月も泊り続けることがあるようになった。それというのが、幸子の夫の貞之助は、計理士をしていて毎日大阪の事務所へ通い、ほかに養父から分けて貰つた多少の資産で補いをつけつつ暮しているのであつたが、厳格一方の本家の兄と違って、商大出に似合はず文学趣味があり、和歌などを作るという風であつたし、本家の兄のような監督権を持たなかつたし、いろいろの点で雪子たちには、そう恐くない人なのであつた。ただあまり雪子たちの滞在が長くなると、本家へ気がねして「一遍帰つてもらたら」と幸子に注意することはあつたが、幸子は毎度、そのことなら姉ちゃんが諒解してしてくれるから、心配しやはらんでもよい、今では本家も子供が殖えて家が手狭になつたことだし、時々妹たちが留守にした方が姉ちゃんも息抜きができるであらう、まあ当分は当人たちの好きなようにさせておいても別条はないと云い云いして、いつかそういう状態が普通になつていたのであつた。

そんな工合にして数年たつうちに、雪子の身の上には格別の変化も起らなかったが、妙子の境遇に思いがけない發展があつたので、結局においてそれが雪子の運命にも或る関わりを持つに至つた。——というのは、妙子は女学校時代から人形を作るのが上手で、暇があるときよく小裂を切り刻んでいたずらしていたものであつたが、だんだん技術が進歩して、百貨店の陳列棚へ作品が出るようになった。彼女の作るのは佛蘭西人形風のもの、純

日本式の歌舞伎趣味のもの、その他さまざまで、どれにも他人の追隨を許さない独創の才が閃いていたが、それは一面、映画、演劇、美術、文学等に亘る彼女の日頃の嗜みを語るものでもあつた。とにかく彼女の手から生れる可憐な小藝術品は次第に愛好者と呼ばれ集め、去年は幸子の肝煎りで心齋橋筋の或る画廊を借りて個展を開いたほどであつた。彼女は最初、本家は子供が大勢で騒々しいので、幸子の家へ来て作っていたが、そうなることも完全な仕事部屋がはしくなつて、幸子の所から三十分もかからずに行ける、同じ電車の沿線の夙川の松濤アパートの一室を借りた。本家の兄は妙子が職業婦人めいて来ることに不賛成であつたし、ことに部屋借りをするのはどうかと思つただけれども、この時も幸子が口をきいてやって、——過去にちよつとした汚点を持つ妙子は、雪子以上に縁遠いわけであるから、何か一つ仕

事を当てがっておく方がよいかも知れない、部屋借りといつても仕事をしに行くだけで寝泊りをするのではない、幸い友達の未亡人が経営しているアパートがあるから、よく頼み込んでそこを借りることにしたらどうであるう、そこなら近い所だから自分も時々様子を見に行くことができる、というようなことを云つて、やや事後承諾的に運んでしまつたのであつた。

元来が陽気な性質の妙子は、雪子とは反対に警句や冗談などを飛ばすといった風であつたのが、事件を引き起した当座は陰鬱になつてしまひ、変に考え込んでばかりいたが、そういう新しい世界の開けたのが救いになつて、近頃は以前の朗らかさを取り返しつつあつたので、その点では幸子の見通しが中つたわけであつた。が、本家からは月々の小遣いを貰つて、そのほかにまた作品が相当な値で売れるところから、自然金廻りがよくなつて、時々びっくりするようなハンドバッグを提げていたり、舶来品らしいすてきな靴を穿いていたりした。これには上の姉や幸子が心配して貯金をすすめたことがあつたが、云われるまでもなく蓄める方も如才なく蓄めていて、ちゃんと郵便貯金の通帳を、上の姉には内証だと云つて幸子にだけ出して見せ、「中姉ちゃんお小遣いがないなら貸したげるわ」と云つたのには、さすがの幸子も聞いた口が塞がらなかつた。と、或る時幸子は、「お宅のこいさ